

神と神々

——ギリシア、ホメロスを中心に——

対象の限定とその根拠

ここでのギリシアが古代ギリシアを指すことは断るまでもないこととしても、その関わる範囲は時代的にも地理的にも広きに亘ろう。紀元前一四、一三世紀に盛時を迎えたミュケナイ文明の遺した線文字B文書が第二次大戦後解読されてみると、すでにそこにわれわれになじみ深いギリシアの神々ゼウス、ヘラ、ポセイドンをはじめ、比較的新しい時代になってはじめてトラキアからギリシアに入ったとそれまで考えられてきたディオニュソスのごとき神名までが読み取られたのであった。ギリシア宗教史の泰斗J・P・ニルソンなどが主張するように、このミュケナイ時代にギリシアの神話ならびに宗教の骨格が出来上ったものか否かはひとまず措くとして、両者の間に連続性のあることは疑問の余地がな

辻村 誠 三

い。今かりにギリシア宗教史の起点をこのミュケナイ文明の盛時である前一四世紀にとり、その終焉をローマ皇帝テオドシウスによるエレウシスの密儀やオリュムピアの競技（これは Zeus Olympios に捧げられた祭事に他ならない）の禁止された紀元三九三年に置くならば多神教を旨とするギリシア宗教は一六ないしは一七世紀間に亘って崇拜され、祭られていたことになる。これだけの時間を現在から過去へと日本において遡るならば、すべての歴史時代を通過して弥生文化の時代に達するであろうし、ヨーロッパではキリスト教が公認される以前のローマ帝国に立ち会うことにもなるうか。宗教がどれほど保守的で安定的なものであるとしても、これほどの期間に変化なしであるうはずがない。

また視点を転じて地理的な広がりを鳥瞰すれば、古典期のギリシア人が築いていたポリスは地中海沿岸のいたる所に見出される。

北は黒海沿岸から南はアフリカ北岸、東はキプロスから西はジブラルタルにまで至る。しかもそれぞれのポリスは政治的に独立した単位であるとともに、それ自身宗教的な共同体でもあった。したがって例えばアテナイ市でもっとも重要な神は女神アテナであり、エフェソスの人々が一番重んじていた神はアルテミスであったごとく、地方的な差異も存していた。

以上に見るごとく、時代的にも空間的にもまことに多様な内容の想定されるギリシア宗教であつてみれば、当面のわれわれの対象を限定せざるを得ない。われわれはホメロスとヘシオドス、とり分けホメロスの作品を通して窺知し得る限りでの神と神々を中心として考察を進めたく思う。

ところでこうした限定は許されるであろうか。そもそもホメロスの作品は『イリアス』にせよ『オデュッセイア』にせよ叙事詩つまり文学であつて宗教書を意図して創られたものではないではないか、こうした反論がなされるかも知れない。そこで本論に先だつて、ギリシア宗教史の内ホメロスが占める位置を簡単に確認しておくべきかと思う。そのことによつてギリシアの宗教の若干の特徴を先取りすることとなるであろう。

そこでまず注目すべき事實は、古代ギリシアにおいてはオルフイック教のごとき、ごく僅かな例外はあるが、一般に宗教的教義の類を一括して定めた聖典、教典のようなものは存しないことである。したがってわれわれが古代ギリシアの神々に近づこうとすれば、

世俗的な文献つまり叙事詩や抒情詩、悲劇、喜劇などの文学あるいは歴史書に頼らざるを得ない。逆にまたこれら世俗的な文学は単なる文学にとどまらず、ごく表面的に眺めても宗教と深いかわりのあることが知られる。つまりホメロスの叙事詩はパンアテナイア祭をはじめ多くは祭事に際して公衆の前で朗誦されたものであつたし、抒情詩の部類に入れられるピンダロスの祝勝合唱歌 (Epitima) はオリュムピア祭、ピュティア祭等々セウスやアポロンのお祭りや催された各種競技での勝利者を讃えるためのものであつた。アテナイで大成されたアイスキュロスやソフォクレスの悲劇、あるいはアリストファネスの喜劇がディオニュソスに捧げられた祭りの一環として上演されたことは周知のとおりである。

さてギリシア史の黎明期、紀元前八世紀の後半に成立したと考えられているギリシア最古の文学『イリアス』と『オデュッセイア』は言うまでもなく、トロイア戦争をめぐる英雄たちの武勲と苦悩を描いた英雄叙事詩であるが、そこには人間の存在者たる英雄たちのほかに多くの神々が、人間世界とはかけ離れた天上で、あるいは英雄たちの地平に降り来たってさまざまに活動する様が描かれる。しかもそこには単に神々が姿を現わすだけではなく、神々とはどのような存在なのか、神と人間とはどのような関係にあるのか、人間の運命とは、あるいは人間の自由とは何なのか、等々宗教的と言うことのできる諸問題に対して一つのまとまつた

解答が、無論理論的な論証によってではなく、具体的な出来事の描写を通して用意されているように思われる。紀元前五世紀の歴史家ヘロドトスの言葉をもってすれば「ギリシア人のために神の系譜をたて、神々の称号を定め、その権能を配分し、神々の姿を描いてみせてくれたのはこの二人（ヘシオドスとホメロス）なのである」（『歴史』巻二、五三章、松笠千秋氏訳、岩波文庫上、一九七

頁）。ホメロス後のギリシア文学が内容的にも表現上でもホメロスの決定的影響下にあつたことは言うを俟たない。アイスキュロスは自分の作品を「ホメロスの大御馳走からのほんの切れ端だ」と語つたという（Athenaios, 8, 347e）。ホメロスの影響は文学の領域には限らない。彫刻家もまたすでにホメロスの描いた神々の姿をますます偉大に、荘重に視覚化するところに眼目を置いていたと言われる。有名なオリュムピアの黄金象牙によるゼウス座像の構想をフェイディアスは『イリアス』第一巻の中のシーン、すなわち懇願する女神テティスを前に、山々を揺り動かしてうへへの首をさげるゼウスに得たとストラボン（9, 38）が伝えている。さらにホメロスの影響は芸術領域とか社会の上層部に限られてはいない。古典時代ホメロスの作品は初等学校教育の教科書としてしばしば用いられたのであって、「ホメロスこそは全ギリシアの教育者」と一般に見做されていた（Platon, R. 806E 参照）。このような次第で、ホメロスとヘシオドスとは、宗教的なレヴェルにおいても局地的な祭祀への分化傾向の強いポリス的ギリシア文化

の中にあつて、オリュムピアの祭事、デルフォイの神託とならんでギリシア全体に及ぶ統合的求心的力として作用したのであつた。以上により、ギリシアの「神と神々」を論ずるに、主としてホメロスに依拠することは許されるであらう。

ではそのホメロス、ヘシオドスが描いて見せた神々ほどのようなものであつたか。彼らが描いて見せた神は形姿ばかりか、その心情までが人間と通じ合い、しかもそうした神が相互に関係をもちつつ数多く存在するのだ、とひとまず纏めることが許されよう。これは要するにギリシアの神々について言いふるされた Polytheism と Anthropomorphism ということであるが、ここでも便宜上この二つの観点からギリシアの神々の実態を考察してみたい。

Polytheism

ヘシオドスはその『神統記』の中に三〇〇にも余る神々の名を挙げてゐる。しかしそこには古い時代に力を失つた神々や、群小の単なる抽象名詞の神格化にすぎないような神々も含まれていたのであつて、ゼウスが最終的に確立した世界秩序の内で大きな役目を荷う神々の数はそれほど多くはない。またホメロスの描写においてオリュムポスの山頂に宮居し、ここでの神々の会議や宴に与る神々が誰々であるのか、必ずしも固定はしていないが、そこで活躍する神々の数もそれほど多くはない。われわれの考察もこれら有力な神々に限らうと思つた。

それら有力な神々はホメロス以後いくばくもなくオリュムポスの一二神として一群に纏め上げられることとなった。それは一般に次の六組の男神、女神たちであった。すなわちゼウス—ヘラ、ポセイドン—デメテル、アポロン—アルテミス、アレス—アフロディテ、ヘルメス—アテナ、ヘファイストス—ヘステシア (Zeus, Hera, Poseidon, Demeter, Apollon, Artemis, Ares, Aphrodite, Hermes, Athena, Hephaistos, Hestia、ときどきヘステシアに代って例えばバルテノンのフリーズではディオニソス Dionysos が登場する)。神話はポセイドンとアテナとがアッティカの領有権をめぐって争ったとき審判役を果した神々とか、オレステス無罪判決の法廷に列席した神々であったとかと伝えてあるけれども、一二なる数が一年の月の数もしくは獣帯の一二宮に対応するとして、それらの神々がいかなる内的基準により選び出され、全体でどのような組織を構成しているのか、あるいはいないのかは必ずしも明らかではない。

印欧語族のもとにおけるパンテオンの構造分析といえは多くの人が最近ではG・デュメジルの提唱する三機能体系説に思いを致すのではないかと思う。この説によれば、印欧語族の神界は三つの階層に分化し、それぞれ(1)魔術的王と司法者的王からなる一対の主権神。(2)第二機能としての戦神。(3)第三には富の生産にかかわる豊穡神より構成されるという。オリュムポス神の内には右の三つの層のいずれかに容易に帰属させ得る神もいよう。例えばゼ

ウスは第一に、アテナとアレスは第二に、デメテルは第三に、といった具合に。しかし例えばアテナの機能は第二だけにどまらず第三の機能にも深く関係するように見えるし、アポロン、ヘルメスなどはやはりどれか一つに帰属せしめることには困難がある。さらに第一、二機能の神々と第三機能の神々の間にかつて確執、抗争があつて、これを克服した上でパンテオンが成立しているというデュメジルの分析はここには全く妥当しそうにない。デュメジル自身初期の一時期を除いてギリシア神界の分析に手を染めなかつたのであろうと思われる。

デュメジルの三区分体系に代わる何か包括的な構造分析理論の用意が筆者にあるわけでは無論ない。ただホメロスのオリュムポス神たちをさまざまな角度から眺め、彼らひとりひとりとはまこと個性的、したがって全体ではまこと多様なのであるが、個々神のその個性は他の神々との相互関係の内に際立つように構想され、したがって全体の多様さは多様さのままに一つの統合を成しているように思われる、その事実注目に向けてみたいと思う。

まずオリュムポス神界の代表者とも言うべきアポロンを取り挙げてみよう。彼は周知のとおり予言、音楽、医術、浄化等々広範な領域を管掌する光明神であるが、この神の根本的特長をW・F・オッターは隔たりに見出している。ホメロスにおいてこの神にしばしば冠せられる形容句 (epitheton ornans) は「遠矢を射る」であり「遠く働らく」(ἐκάρυβόλος, ἐκρυβόλος, ἐκτεπέρος,

εκτρος)である。彼が冬の期間を人界から遠く離れ、極北のヒュペルボレオイ族のもとに過す神話はよく知られていよう。事物のうちへの埋没、神秘的な陶醉を彼は卻ける。熱のこもった愛ではなく、隔たりにおいて成り立つ認識と自由とを彼は求める。

この男性的な隔たりの女性的対称者が神話上、アポロンの双生児とされるアルテミスである。彼女もアイスキュロスの作品(Suppl. 676)の中では「遠はたらきの」(εταρα)と形容され、アポロン同様に弓矢が特徴的持ちものである。処女神である彼女は人間界に姿を見せることは滅多になく、人跡まれな山野を棲家として野獸を追い、かつこれと戯れる。異性に対しては無愛想な野性の清純さの女神なのである。

アルテミスが隔たりと野外の処女神であるのに対して、処女神なる点で共通しながらアテナは別の局面ではその対極にある。つまりもととミュケナイ時代の館、城塞の守護神を前身と考えると考えられるアテナは内なる神、近みの神と見ることが出来る。彼女は家の内での手仕事を司る神であるとともに、英雄イアソンと人類最初の大船を建造し、ペレロフォンには神馬ペガサスを乗りこなす術を教えた。彼女が知謀にたけた英雄オデュッセウスを終始庇護することはよく知られる。処女神ながら彼女は男性英雄たちとの交わりに何の躊躇も感じることなく、すぐ近くに寄り添い、いわば手どり足どり導く。ホメロスで「豊かな知慧の」(πολύβοιος)と形容され、ヘシオドスでは彼女を懐妊した思慮

(Μητις)を飲み込んでしまった父ゼウスの頭から月満ちて生まれ出たとされているが、ここに強調されているアテナの思慮、知慧はアポロンの純粋な認識、学問ないしは芸術とは本来関係なく、彼女の寵児オデュッセウスの知慧がそうであるごとく、実際のな創意工夫に通ずるものであった。

内における手仕事という点でアテナと共通点を持つのが鍛冶と細工の神ヘファイストスであろう。女神アテナがもっぱら父親と親密であることと軌を一にして、むしろそれと交又関係をなしつつ男神ヘファイストスは父ゼウスからは疎外され、母ヘラとの結びつきを密にする母親っ子である。彼もホメロスで「豊かな知慧の」(πολύβοιος)と形容されるが、その知慧はアテナの場合よりもさらにはっきり職人的な實際知に限定され、オリュムポスのパントオンにおける地位はゼウスの愛児アテナには遠く及ばない。アテナにはさらに軍神としての看過できない機能がある。その点で彼女はアレスと共通する。だがヘラの息子神アレスは徹頭徹尾の軍神、しかも無謀な流血と殺戮の神であって思慮をともなうアテナとは軍の別の局面を代表する。彼はアテナとは異なり父神ゼウスにも疎んぜられ、嫌われ者であって、家族の絆を脱して外界をうろつく一匹狼的などころがある。

その点での女性的対偶としてアフロディテを考えることができよう。この美の女神のかかわる愛は奔放不羈、社会的規範の域外にはみ出す態のものであった。有夫の美女ヘレナがトロイア王子

パリスとともに出奔し、トロイア戦争の発端をなしたのはアフロディテの仕業にほかならなかったし、彼女自身ヘファイストスの妻でありながら、かのアウトサイダーたるアレスのとの密会の現場を夫の作った巧みな網にからめ取られる悪名高い場面が『オデュッセイア』に描かれる。性愛との関係において彼女が先述の二処女神アルテミスとアテナとの対極に立つことは言うまでもない。

しかし彼女は同じく配偶神をもち、結婚を司る女神ヘラに対しても対立関係にある。ヘラの司る男女の仲はあくまでも社会的規範にのっとったものであって、アフロディテの自由奔放な危険な愛ではない。ホメロスでヘラが夫ゼウスの情事に神経をとがらせ、嫉妬深く夫の行動を見張るのも、こうした彼女の本質のしからしむるところなのである。

オリュムポス神族の内では古い時代の神格の痕跡をおそらくもつとも多く留めるヘルメスは神々の使者にして、死者の魂の導者、人間たちの助け手とさまざまな機能を果す神であるが、『イリアス』の終り近く、トロイアの老王プリアモスを導いて、息子ヘクトルの死体を贖うため夜のしじまを敵将アキレウスの陣屋に案内する場面にはヘルメス神の本質が集約的に表現されているように見える。ここに見られる手ずから導くヘルメスはあの近みの神アテナに通じ合うが、アテナが同時に内なる神であったのに対し、ヘルメスは徹頭徹尾外の神、途の神、路上を活躍の場とする神である点で両者は相反する。物みな明らかな輪郭を失なう夜の精へ

ルメスはまたあの光明と隔たりと認識の神アポロンにはほとんどあらゆる点で対極をなす。魔術的、道化的なヘルメスにはおよそアポロンのな高貴さが欠如している。

これまでに挙げた神々の多くにとつて叔父、叔母に当る地位にポセイドンとデメテルが居る。ともにエレメント的なもの、水、土とに密接な結びつきをもち、古い時代には大きな神格であったことが想像されるが、ホメロスにおいてはそれほど大きな意味をもたない。とり分けデメテルはディオニソス同様ホメロスでは影うすき存在である。なお竈の神ヘステリアはホメロスの作品中には神格としては言及されることがない。

以上ホメロスにおいて大きな役を演ずるオリュムポス神を取り挙げ、その根本的特徴を相互の関係において眺めた。それらの神はもともとその出自も来歴もまちまちであろう。ゼウスのように印欧語族共通の昔に由来するもの、アポロンのごとく小アジアとの結びつきの強く感じられるもの、さらにはアフロディテのごとくはつきり遠くオリエントの昔に遡ることのできるもの等々である。このようにさまざまな由来の神々が、互いにあるときは親和しつつ、又他の局面では反撥し合うダイナミックな緊張をはらんで一体を成しているのがホメロスのパンテオンだと見ることができよう。それぞれの神が世界（それはあるときは自然的世界を、また他のときには人間の社会的関係としての世界を指すであろうが）のある特定の領域を代表し、あるいは特定の仕方世界を映

じ出しつつ、全体で一つの統合を成している。その統合の証しが王であり家父であるゼウスだと言ふことができるであろう。

ゼウスもまた世界の内のある特定の領域、つまり天の氣象を司ることは「雲を集める」(νεφεληθήρα)「高く雷鳴をとどろかす」(βρονχέστρως)等々ホメロスに類出するエピソードが示している。しかし同時にすでにホメロスにおいてゼウスは「神々と人間たちとの父」(例えば II. 1, 544)と呼ばれ「最大なるもの」(μῆστρος II. 2, 412)と崇められてゐるのであり、系譜に見るとおり、偉大なるオリュムポスの諸神を取り纏めて家長の地位についている。神々の内のある者がゼウスに逆って異議を唱へることもあろう。ゼウスを騙して自分一個の意図の完遂の計られることもあろう。しかし最終的にはオリュムポスの神界においてゼウスの意図に反しては何事もなされ得ない。しかもその際ゼウスと個個のオリュムポス神との関係は決して主人と下僕、王と奴隸といったものではなく、上述のごとく家長とその一族と見做されてきたことは注目しておくべきであらう。それはともあれアイスキュロスのある断片 (Fr. 202) の中には次のとき文句さえ見える。「ゼウスはアイテル、ゼウスは大地、ゼウスは天、ゼウスはすべてにして、これらすべてよりさらに上なる者」と。こうした一切を統括するゼウスの下における個性的なオリュムポス諸神は、現実世界の多様性を終極的な統一性の相のもとに映し出すものと考へることが許されるのではないか。今回のシンポジウムの統一テ

ーマ「神と神々」に則して定式化するならば、古代ギリシアのオリュムポスの多神教は「神にして神々」もしくは「神々にして神」と言ふことができるのではなからうかと思われる。

Anthropomorphism

次に目を転じて Anthropomorphism の側面に注目してみよう。われわれはそこにおよそ徹底した Anthropomorphism を見出すであろう。

ヘシオドスの作品『神統記』は元初の神の出現から説き起こし、ゼウスによる最終的な秩序の確立までを、プロメテウス神話などの挿話を混じえて語りつくすものであり、序論のあとの本論は次のように始まる、「まず初めにカオスが生れた」(Th. 116)と。カオスは在ったのでも、創られたのでもなく、生れた (γενεο) のであつた。ついでガイアとエロスとがやはり生れ、大地を意味する女性名詞でもあるガイアが独力で、天を意味する男性名詞でもあるウラノスを生んだ (γενε) 後は、ガイアとウラノスとが共寝してオケアノス以下を次々と生む。この辺の物語は世界生成過程の物語でもあるのだが、事態の進展はすべて「生む」(τίκτω)、
「生れる」(γεννώμαι)、「共寝する」(εὐδάμομαι)と云つた生物的生殖のイメージで一貫している。つまりギリシアの神々はいずれも、ユダヤ教キリスト教的創造神とは異なり、自ら生れ、子を生む。その点でイザナギ、イザナミによる日本の神生みの神話と発

想を同じくしているように見える。多神教の神々の出現はいつもこのような人間的な生殖活動によるのかと言え、必ずしもそうとも言えない。例えばローマの神界にはやはり多くの神々が並存しているが、もともとはそれぞれ独立であって、夫婦、親子等の関係では結ばれていなかったものと考えられているし、ヒッタイトの神界覇権推移の神話（アラルーアヌークマルビーテシヌブ）はヘシオドスのそれ（ウラノスークロノスーゼウス）とパラルをなすものであるが、前者では親子関係は語られていない。とすればヘシオドスに典型的に見られる徹底した系譜化はギリシアの特徴の一と見做されるであろう。

かくして生まれ出た神々の行状事績を語る詩人たちは神々を全く人間化して (anthropomorph) 眺めている。アテナ女神は天から地上に降り立って英雄アキレウスの髪をつかんで自分の方に振り向かせる (II, 194ff)。それどころか英雄ディオメデスはこともあろうに神であるアフロディテやアレスに槍で傷つけさせる。するとアフロディテは神の身ながらに傷の痛みに打ち挫がれるのだ (II, 530ff)。すなわち神々は人間的な姿で表象されるだけでなく、人間同様に愛し、憎しみ、また悲しみにおそわれ、尽ることのない苦笑に身をゆだねることのある存在者と考えられている。要するにギリシアの神々はその全き肉体性ぬきにしては考えられない。

なるほど神々は人間の知力をはるかにしのぎ、その計画は遠く

未来に達することができよう。また人間には考えられない遠距離を短い時間に疾過することもできるであろう。しかしその点では結局、ホメロスがときに神々について用いる形容詞を用いれば *relatious* にすぎない。つまりこれは比較級形容詞であって「より強きもの、優れているものたち」というにすぎなく、神々は全知でもなければ全能でもない。二人の英雄アキレウスとヘクトルの決闘に際して、ゼウスは秤を取り出して二人の死の運命を置いて計る。ヘクトルの運命の日が降ってその死が確定するのである (II, 22, 205ff)。ゼウスは自分の愛する息子さえ死から救い出すことができないで深い歎きをもらす (II, 16, 419ff)。すなわちギリシアにおいては神々といえども世界の秩序をみだりに覆すことはできない。彼らも自然の秩序に服している。ホメロスにおいては神々によって惹起される奇跡的な出来事は、例えばキリスト教聖書に比べたいたって少ないことは多くの学者が指摘している。教父テルテュリアヌスの「不合理なるが故に我信す」(credo quia absurdum) はこうした自然的な異教の神々を意識して、それとの対比において述べられた言葉とされるが、だとすればテルテュリアヌスはまさにギリシアの神の在り様を洞察していたと言わべきであろう。ホメロスの神々の自然性に関して B・スネルが「ホメロスではある一人の英雄が強いのは神が助けるからではなく、その英雄の強さを人々に理解させるために神の助力がもち出されるのだ」といった意味のことを記しているが傾聴に価する言葉だ

と思われる。神々がギリシアにおいて表象されるときに伴うその肉体性はこうした神々の自然性、世界の内に在ることの証しにほかならぬであらう。

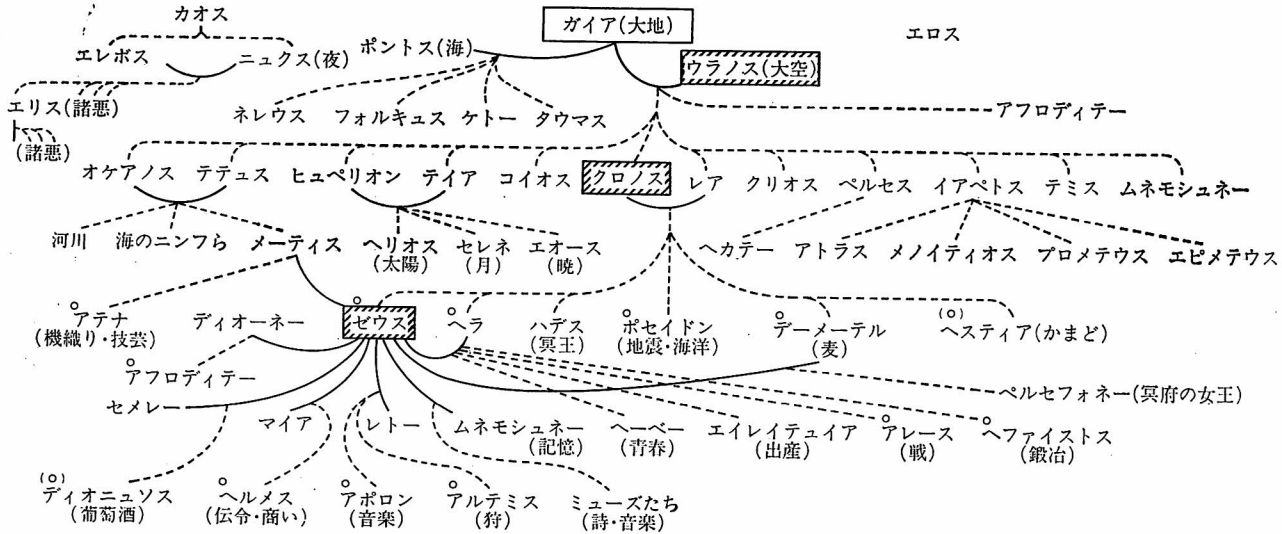
さてそれではギリシアの神々は肉体性を伴って人間の姿に描き出されることで尽きてしまふであらうか。決してそうではあるまい。ギリシアの彫刻家の彫り出した神々の像はただの人間の似姿ではない。言うまでもなく男女の別があり、年恰好についても各各の神の本質に従って青年神あり、壮年の神ありとさまざまに特殊化されてはいるが、それぞれの場において理想化された姿であったことを、あるいは理想化の意図をもって彫り出されていたことを思うべきではないであらうか。それはそれぞれの場合における一つの典型の樹立が意図されていると言うべきであらう。

ギリシア人は神々を *anthropomorph* に見做し、描いたが、彼らは同時に神々と人間、その違いをいとも明確に、何の曖昧さも残さぬ仕方をつけていた。神々と人間とのけじめ、それは死であった。ホメロスにおいて「不死なるもの」(*atartaroi*) といえは神々のことであり「死すべきものども」(*thnroi, sporoï*) といえは、それは人間たちのことであつた。あるいは神々は「常にまします」(*aiet' eousen*) のに對し人間たちは「その日限りの」(*egh' h' emeron*) 者どもとされた。したがって人間存在たる英雄たちの没落と死と、それにまつわる苦惱とについてはホメロスの叙事詩も悲劇も際限もなく多くのことをわれわれに語り聞かせてくれ

るのに對して、ギリシアの神々については誕生譚こそ語られず、その死の語られることは本来決してないのである。すなわちギリシアの神々はこれまで見てきたような明々白々たる肉体性をともしつつも時間を超えた永遠の存在と考えられていたことになる。このことを納得の行くように合理的に説明することはわれわれには困難、というよりむしろ不可能に近いのであるが、古代ギリシア人のもっとにおいて肉体性と永遠性、この兩者を媒介するのが形、姿 (*Anthropomorphism* と云ふ場合の *morphe* である)、プラトンがときにイデアと同義に用いている *morphe*) だったのではなからうか。

われわれ日本人には姿、形というものを永遠性の概念と結びつける考え方はなじみにくい。われわれは形あるものはいつかは必ず亡ぶと感じている。その意味で形はむしろはかなさと結びつくであらう。たしかに形あるものはいつかは形を変え、別の形になり、その意味で亡ぶであらう。しかしその際形あるものとは別に形そのものはどうであらうか。現実の形ある個々のものを、そのようなものとしてある典型としての形は、とにかく古代ギリシア人は世界の内にあって、われわれの感官に訴えるリアルなものでありながらなおかつ永遠なもの、超時間的な完全なものは形を成さねばならないと考えていたように思われる。彼らが神的なものを形なきものに留めておかず、あるいは感覚を感乱させるような奇怪なシンボルによって表わそうとはせず、理想的典型的な人間

図1 神々の系譜

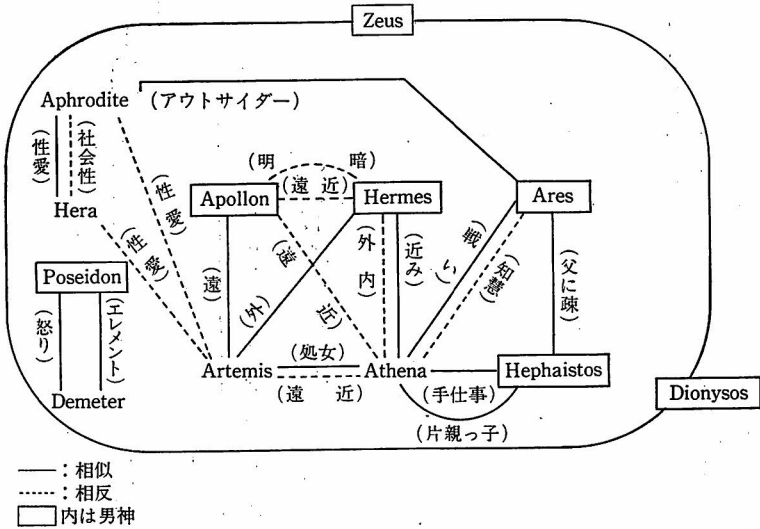


-----: 子供 ◡: 結婚

* 久保正彰著『ギリシア思想の素地』101頁(岩波新書)より借用。

* オリュムポスの12神を示す○印は辻村の添加。

図2 オリュンポス神の相関図



の姿、形に描き出そうと努めたことの内には、不易な形に対する
 そうした彼らの信念があったのであり、それがほかならぬ彼らの
 神々の Anthropomorphism であつたと言つておけるものでは
 なからうか。

(つじむら・せいぞう、古代ギリシア思想・比較思想、

筑波大学教授)